



多くの市民が参加した「ひきこもり市民教室」

# ひきこもり体験を語る

## 越谷 「市民教室」で現状報告も

越谷市保健所はこのほど「ひきこもり市民教室」

を同市役所会議室で開催し、ひきこもりの人がいる家族ら15人が参加した。家族の不安の軽減や孤独感の解消を図るため実施した。昨年に続き2回目。今回のテーマは「地域で見守り、支える ひきこもり」。同市内にある埼玉県ひきこもり相談サポートセンター長でNPO法人越谷らるる理事長の鎌倉賢哉さん(49)と、ひきこもり経験者の30歳代男性が講師となり、ひきこもりの現状や家族の対

応の仕方などを話した。

鎌倉さんは40歳から64歳までのひきこもり状態にある人が全国で60万人を超えるとの内閣府調査結果を伝え、8割が男性。

本人の困り具合が見えないことが問題」と指摘。「本人の困り具合、どのくらい生きづらいかに目を向けてほしい」とアドバイスした。

サポートセンターでの相談内容は「ただ話を聞いてほしいという内容が最も多い」とし、心が傷ついた体験をきっかけに、不登校な

ど「社会的関係(学校など)」

から撤退する時期には「学校に無理に行かせない。安心してひきこもれるようにすることが重要」と指摘した。

30歳代男性は、中学校で不登校になり、部活(科学部)だけ学校に通っていたことを先生から指摘され、10代前半でひきこもりようになった。昼夜逆転の生活で、深夜放送のラジオを聴いていた。幼い頃から父親から暴力を受け、ひきこもるようになってからは、さらにエスカレート。日常的

に暴力を受けていたため、警察に通報。その後、暴力は止まった。

ひきこもりから回復するきっかけは、両親が病気になる、病院などの手続きで外出するようになったこと。さらに父親ががんで死去。男性は(父親の死去で)

心に青空が広がったように感じた」という。眼科に通院していたが、「ひきこもりのことは聞かれず、通い

やすかった」。

「越谷らるる」を知り、2011年に当事者同士の集まり「ほっとりんご」に参加すると、気の合う人と会話するようになった。その後、就労訓練を行い、17年10月にスーパーに就職。現在も働いている。

男性は「自分のことを知らない地域の方が活動しやすい。『本人の思い』と『家族の思い』は同じではない。

本人の思いを大切にしてくれたら、社会参加のきっかけをつかみやすいと思う」と結んだ。

参加者からは「支援は本人や家族を傷つけることがあり、難しさを痛感した」「男性の話に胸を締め付けられた。コミュニティーの緊密さが良い悪いあると知り、支援方法を考える良い機会になった」などの感想が聞かれた。